樹覚寺門信徒だより

浄土真宗本願寺派　樹覚寺　足利市本城三丁目２０５５　編集　門徒推進員

＊＊＊＊＊＊　浄土真宗生活信条　＊＊＊＊＊

一）み仏の誓いを信じ　尊いみ名をとなへつつ　強く明るく生き抜きます
一）み仏の光をあおぎ　常にわが身をかえりみて　感謝のうちに励みます
一）み仏の教えに従い　正しい道を聞き分け　まことのみのりをひろめます
一）み仏の恵みを喜び　互いにうやまい助けあい　社会のためにつくします

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宗祖親鸞聖人降誕会法要

親鸞聖人は承安３年（１１７３年）の５月２１日に京都の日野でお生まれになりました。仏教では一般に行事といえば人が亡くなってからの年忌法要等が多い中で、お釈迦さまのお誕生日を祝う「花まつり」と並んで聖人の「降誕会」が毎年行われていることは私たちにとって特別に意義深いことであります

◎期日　　５月９日　（第２土曜日）

◎時間　　午後１時３０分～２時１０分・・・法要　正信偈

午後２時１５分～２時５５分・・・法話　人形劇

法要には、浄土真宗本願寺派・栃木南組の各寺と近隣の同派のご住職が多数ご出勤し、お勤めして下さいます。

今年の法話は、安藤けい一先生によるひとり人形説きです。浄土真宗や仏教のみ教えを、人形を通して楽しく分かり易く説かれていきます。演題は【王様とハトとタカ】です。　王様の元へ鳩が鷹に追われ、迷い込みました。鳩を救えば鷹が、鷹を救えば鳩が命を落とします。考えた末、王様は自分の肉を鷹に与えようとますが・・・　　さてさてどのような結末になるでしょうか？？

皆様多くの方に御声かけ下さい。お子様やお孫さまにも是非足を運んでいただきたいと思います。売店にてパン等の販売もございますので御利用下さい。

抽選会や焼きまんじゅうの引き換え後、

ぜひ法要・法話を御聴聞下さい

第35回　東京教区仏教壮年会連盟

結成記念日研修会に参加して

梅がき始めた頃に参加して、今桜が咲いた頃に、このレポートを書いてだいぶ忘れてしまいましたが、２月１４日・１５日、群馬の磯部温泉で開催されました。

テーマは【そっとつながるホッがつたわる】

サブテーマは【今まで通りで良いのでしょうか？】

講師は、心理カウンセラーの富田富士也氏でした。当日の午後から翌日の午前まで、五時間近くの講義でした。富田先生は普段子供と接しているせいか、内容がどんどん変わるので中々ついていけない。

参加者は、１都８県から２００名以上が参加され、７０才以上の男性が殆どでした。翌日の講義は、テーブルをはずし、休憩なしでした。

話の中で印象に残った言葉は、

◎甘えられることは信じられるから

◎人間関係を相続することも大事

◎ご聴聞という言葉の“聴”と“聞”とはどう違うのか

最後は、ワークショップで、自分の幸福度を座標軸で表し発表しました。
実りある有意義な研修会でした。　　（記　釈声純）

樹覚寺仏教婦人会総会開催

平成２７年度の樹覚寺仏教婦人会の総会が４月８日(水)午前１０時３０分より(あけし会館)に於いて開催されました。

記

１．平成２６年度　事業報告・決算報告　……　承認されました
２．平成２７年度　事業計画・収支予算案　……　承認頂きました

≪今年度の当面の活動について≫

☆　６月２２日(月)　栃木南組仏教婦人会総会　＝西林寺＝にて開催
☆　７月　２日(木)～３日(金)　一泊研修旅行（壮年会の方々と共に）
＝山梨県富士吉田への旅＝
☆　８月　８日（土）　仏教婦人会・仏教壮年会との物故者合同追悼法要
☆　９月１８日（金）　千鳥が淵全戦没者追悼法要参加

総会終了後、昼食をいただき、午後１時より本堂に移り、若坊守様による仏教讃歌の御指導を受けました。その後お正信偈をお勤めし、ご住職のご法話を頂きました。
今後とも婦人会活動にご理解とご協力をお願い申し上げます。

樹覚寺仏教壮年会総会の予定

平成２７年度樹覚寺壮年会の総会が５月２３日（土）にあけし会館に於いて開催予定です。会員の皆様には地区役員（寺世話人）を通してご連絡致しますので、会員の多数の皆様がご出席下さいますようお願い申し上げます

☆★お願い★☆

壮年会・婦人会の各会員を募集しておりますので

ご検討くださいますように宜しくお願い申し上げます

＜もうきふぼく＞
≪盲亀浮木≫

私たちが、よく使う【ありがとう】・漢字で【有り難う】。実は、仏教に由来する言葉だそうです。そのもとになったお話を紹介致します。

お釈迦さまが、ある時、阿難(あなん)というお弟子に、「そなたは、人間に生まれたことをどのように思っているか」とたずねられた。「はい、大変喜んでおります。」と阿難は、答えた。お釈迦さまは、「では、どのくらい喜んでいるか」と重ねてたずねると、阿難は答えに窮した。するとお釈迦さまは、一つの例え話をされました。

それは、今日、≪盲亀浮木の譬え(もうきふぼくのたとえ)≫

と言われているお話です。

果てしなく広がる海の底に、目の見えない亀がいる。その亀は、１００年に一度、海面に顔を出す。広い海には一本の丸太棒が浮かんでる。その丸太棒の真ん中に小さな穴がある。丸太棒は、風のまにまに、波のまにまに、西へ東へ、南へ北へと、漂っている。「阿難よ、１００年に一度浮かび上がるその目の見えない亀が、浮かび上がった拍子に、丸太棒の穴にひょっと頭を入れることが有ると思うか。」聞かれた阿難は驚いて、「お釈迦さま,そんなことは、とても考えられません。」と答えた。「絶対にないと、言い切れるか。」とお釈迦さまが念を押されると、「何億年×何億年、何兆年×何兆年の間には、ひょっと頭を入れることがあるかもしれませんが、ないと、言ってもよいくらい難しいことです。」と阿難が答える

「ところで、阿難よ、私たちが人間に生れることは、その亀が丸太棒の穴に首を入れることが有るよりも難しいことなんだ。有り難いことなんだよ。」と教えられました。

ここから有り難い　⇒　ありがとう　という言葉になったようです。